

今日の講座で取り上げられた漢詩『山に上りて蘼蕪を採る』は、なんと離婚した二人が山菜を取りに行った山でバツタリ出逢う、といういささかお笑いコントのようなシチュエーション。中国では、そこそこ有名な作品だそうです。

出典は『玉台新詠』という6世紀頃、遣隋使で知られる隋が全国統一する前の、南北朝時代の詩集。この時代、歴代帝王は武人というより文人に偏り、現在の南京を舞台に華やかな文化が花開いていたという歴史的背景から講義は始まりました。植田先生の講義はいつも泉が湧くが如く滔々と歴史背景が語られ、ワクワクするほど面白いのです。口伝の素晴らしさ、植田先生の言葉のセンスを十二分に味わえるひと時です。

さて、この「玉台新詠」は皇太子の命令で集められたのですが、主に男女の恋愛や愛の葛藤を詠った作品が中心。どちらかと言えばナンパな文学といえるそうです。この頃、宮体詩という艶っぽい詩が流行っており、そんな歌が多い詩集の冒頭を飾るのが今回の作品なのです。漢詩といえば「堅苦しいイメージがあるかもしれないですが、こんなコミックな詩も探せばあるよ」という、代表作。

山に上って、蘼蕪を採り、帰りに別れた夫に出逢う。

先の夫に跪き、「今の御人は如何です」

「今の御仁も悪くはないが、やっぱり先のが上だった。

顔や姿は似ていても、マメな手つきがちと違う」

shàng shān cǎi mí wú
上山采蘼蕪

wú míng shì
无名氏

shàng shān cǎi mí wú
上山采蘼蕪

xià shān féng gù fū
下山逢故夫

cháng guī wèn gù fū
长跪问故夫

xīn rén fù hé rú
新人复何如

xīn rén suī yán hǎo
新人虽言好

wèi ruò gù rén zhū
未若故人姝

yán sè lèi xiāng sì
颜色类相似

shǒu zhǎo bù xiāng rú
手爪不相如

xīn rén cóng mén rù
新人从门入

gù rén cóng hé qù
故人从阁去

xīn rén gōng zhī jiǎn
新人工织缣

gù rén gōng zhī sù
故人工织素

zhī jiǎn rì yī pǐ
织缣日一匹

zhī sù wǔ zhàng yú
织素五丈余

jiāng jiǎn lái bǐ sù
将缣来比素

xīn rén bù rú gù
新人不如故

* 蘼蕪：蘼蕪。山草の一種。古くから香草、薬草として重宝がられた。

「今の御人が門から入り、先のは裏から出て行きました」

「今のは黄色い絹を織り、先のは白い絹を織る。

黄色の方は日に四丈、白は一日五丈を超えた。

黄色と白とを比べたら、今のは先のにかなわない」

(植田先生 訳)

この詩の主人公は、妻に養ってもらっている気弱なヒモ男、期せずして前妻に出くわし、怒鳴りつけられるのが怖くて、前妻を持ち上げ言い逃れをしている様子。および腰の頼りない男と、毅然とした元妻というのが、植田先生のイメージ設定。「元妻が偉かったというよりは、オトコがだらしないって感じなんだよねー。色んな解釈があるけど、気弱なヒモ男が主人公とすると、面白い」と。

先生の模範朗読も、ナレーション部分に始まり、毅然とした前妻と、および腰のオトコの掛け合い漫才の様に詠まれて、あまりに見事で受講生一同から拍手が湧き上がりました。「詩は物語と違って、イメージだけを提供し、読み手がそれをどう受け止めるかは自由。想像力を膨らませ、自分なりの解釈で味わえることが詩の醍醐味」という先生のお言葉に成る程、と深く納得しました。

この時代、農村に暮らす庶民の男は野良仕事、女は機を織り暮らしていました。南方の自然豊かな土地では、女は離縁されても自活していったようです。山に行けば食べ物も薬草も採取出来たし、飢えはしなかったことでしょう。男はむしろ女に食べさせてもらっていたという、貧しいながらも男も女も気楽な時代だった様です。詩中の二人の離婚理由は子供が生まれなくて離縁されたか、姑に気に入られなくて追い出されたか、夫の浮気だったかは不明だけれども、今の妻は表玄関から堂々と迎え入れられ、元の妻は裏口から追い出されたか、飛び出したか、という状況だったようですね。最初は礼儀正しく元夫に跪き挨拶をした元妻が、途中で、「今の奥様は表玄関からお迎えでしたよね、私は裏口から去った身ですけど!!」みたいなイヤミを入れているとこ

ろが微妙にスリリング!? それに対して「イヤイヤお前の方が仕事は立派だったよ～。だってさ、お前の方が一日あたりの仕事量も質も上だったからねえ」と、男の言葉が続いて詩はここで The end。

「その後どうなったかわかりませんが、この後、元妻からもっとひどい一言があったかどうかは不明だしねえ」と。植田コメントは本当に可笑しい。この講義の後、私も一人の女としてこの元妻の気持ちになって考えてみたら結構面白かったです。

「今の嫁もお前も、みめ形はまあ同レベルだけど、お前の方が仕事力は上だったね」みたいなことを言われて、女心はどう感じるか? 「お前の方が女として好きだったよ」とは言われていない上に、自分と今の妻の作業量を細かに比べた上、「稼ぎはお前の方が良かったと思ってる

よ」とのたまう元亭主の背中に、私なら、微妙に女心の痛みを感じつつ、「あっ、そ!!」とばかりに後ろ足で砂を蹴るが如く、プリプリと去るかなあ(笑)。(ヒモ男の浮気が原因だった場合ですが)。勿論、そんな気持ちは微塵も見せず、「まあ、そうですね。末長くお幸せに」と微笑みながら、気の利いた言葉を掛けて、優雅に去れる程の度量を持ちたいものですけど……。



イラスト 満柏